

祈りの友 第186号

2022年9月

日本の子どもの救いのために ③



フレッド 田中

「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべての事について感謝しなさい。」
(1テサロニケ 5章16-18節)

前回までのあらすじ

日系二世として1933年カナダに生まれたフレッドは、終戦後、カナダから引き揚げて両親の故郷山口県に家族とともに移り住んだ。敵国から来たと言っじめられたそれからの数年は、フレッドにとって最も辛い日々となった。11年後、カナダに帰り、ファミリーキャンプで救われた。職場で大けがを負ったフレッドは、神の導きで聖書学院に入学することになった。

児童伝道への召命

聖書学院を卒業した年の夏、オンタリオ州で毎夏行われていたCEFの夏期宣教師プログラムに参加した。

CEFスタッフによる2週間の住込み特訓を受けた直後に、8週間の実践を伴うプログラムだった。さんび、祈り、宣教物語、暗唱聖句、聖書レッスン、個人カウンセリングの1時間プログラムをして、次の場所に移動。この5日間子ども会(月～金)を毎日4か所、ひとりで行なった。土曜日は、別の町に移動。日曜日はホームステイの家族が通う教会であかしをし、CS奉仕をした。

大変な厳しさと喜びを体験した貴重な夏だった。ひとりで、33か所の子ども会、8週間で聖書のお話(レッスン)だけでも165回、40人以上の子ども

ちに出会い、救いのカウンセリングをしたのだ。場所は、家の芝生、車庫、公園、学校の校庭、空き地、山の丸太の上など、さまざまな所で行った。

さまざまな環境に置かれた子どもたちと直接触れ合った。それぞれに必要なを抱え、何よりも真実な愛を求める子どもたちの表情に毎日取り囲まれた。とりわけ、母親を亡くしたばかりの三人兄弟との出会いは大きかった。親を失った悲しみの中で、ただ一人、まだイエスさまを知らない幼い弟のために熱心に祈る兄弟が、子ども会を通して幼い弟がイエスさまを信じた途端に見せた喜びにあふれた姿、私を見上げたその6つの輝いていた青い目は、今でも私の心に焼き付いている。

その後、ミシガン州のCEF児童伝道学院に入学。将来の働きの場を求めている頃、親しくしていた神学生から、「フレッドは日本に行くんだらう」と言われ続けていた。祈りの中で主は日本に行くことを語りかけられていた。日本の子どもたちに福音を伝えねばならない。日本語を話すことができ、児童伝道にも使命を感じている。しかし、私にとって日本は考えたくもない国。日本に行くべきだろうかと自問自答の祈りの中で過ごした日々。

そんなある日、CEF学院の実習先で湖のほとりを歩いていると、私の目の前を一隻の大きな船が通った。その甲板には風にたなびく日の丸の旗。その鮮やかな光景を見て、私は神さまの疑うことのできない導きを確信した。私の心の中で「日本」と「子ども」が結び合わされた。

1963年9月、CEFの宣教師として再び日本の地を踏んだ。1966年3月ジェインと結婚、以来二人三脚で児童伝道一筋、宣教に取り組んで現在に至る。

日本 CEF での働きをふりかえって

40年以上前になるが、記憶に残る恵みを2つお分かちする。

一番思い出に残る子ども

「先生、お祈り下さいい…。」 キャンプファイヤーですばらしい救いと献身の証しをされた6年生のユリちゃんからの手

紙だった。「…2学期に新しい女の子が私のクラスに転校してきました。とても気むずかしくていやな子で、みんなに嫌われて一人ぼっちになっていたの、かわいそうと思って友だちになったら、クラス全員に背を向けられ…一緒にキャンプに行った友だちまでが…仲間はずれにしたの。私、とても悲しいです。先生、どうしたらいいの。お祈り下さい。」

私が返事を書く前に又手紙が来た。「先生、お祈りありがとうございました。私もう大丈夫です。マタイ5:1-11、特に9-11節でイエスさまからすばらしい約束をいただきました。私がとても幸いな人であることがわかりました。」勝利の手紙だった。

11月の中ごろ、「先生、その子が教会のクリスマス会に来るようお祈り下さい。」

12月終わりごろ、「先生、あの子クリスマス会に来ました。…それからね、クラス全員との関係が元通りになりました。」主にある喜びの手紙が届いた。

未信者の家庭から、バイブルキャンプに行く機会が与えられ、救い、確信、献身、御言葉と祈りによって力強く歩み、成長していったユリちゃんを通して大きな励ましを受けた。

一番思い出に残るバイブルキャンプ

1980年代の夏、熊本県阿蘇山のふもとにある野外キャンプ場(なべんだいら)でもたれた、小中学生、2泊3日の教会キャンプに講師として(妻と)招かれた時の特別な思い出のキャンプ。

前日、3人のキャンプ責任者たち、若い女性宣教師と2人の女性牧師が最終打ち合わせをしていた。一つ心配ごとが起きていた。台風が接近している。進路はキャンプ場方面だ。3人は祈り、主に委ねて予定通りおこなうことにした。

翌日、穏やかな天気だった。予定通りキャンプ場に着き、子どもたちを3グループに分け、おのおの8人用のテントを自分たちでわいわい楽しく張った。私もふたり用のテントを渡され…自分で好きなところに張るよう言われた(自分で張った経験なし!!)。

みんなで昼のお弁当を食べ、午後からの予定を楽しみにしていた。しかし、

空がだんだんあやしくなってきた。

屋外の調理場で夕食の準備が始まる頃、雨が降り始めた。台風予報では、進路は変わらず夜11時頃、キャンプ場を直撃する。キャンプ事務所に親たちから心配の電話がジャンジャン鳴る中で、3人の先生方は穏やかに大丈夫ですと答えるのだった。

心配で慌ただしい中、急いで夕食をとり、集会用テントに集まって祈ることにした。なるべく大きな声でさんびをして、みんなで天の神さまに祈った。「…台風の進路をそらせてください。熱帯低気圧にしてください。」夜7時頃だった。

スピーカーから大きな声が流れた。「台風の進路がそれました。もう大丈夫です。」

テント中からわーっと喜びの声が上がった。その夜はみんな、心の喜びをもってイエスさまに感謝し、安心して眠りについた。

翌日は朝からすばらしい天気となり、みんなの心も楽しさいっぱいに見えた。さんびも祈りも、お話を聞く姿勢も楽しさいっぱいになっていった。

午後、思いもかけない大きなサプライズがあった。キャンプ事務所の人が言った。「今晚キャンプファイヤーを予約していたグループが台風のためにキャンセルされました。教会の皆さん、使いますか?」

思いがけない神さまの恵みに感謝して、その夜キャンプ場の真ん中で、大きなキャンプファイヤーを囲んで思いっきりさんびと証しの時をもった。一般の利用者たちも参加して、さんびと主の証しを見て聞く機会となったのである。

※主のなさるご計画はすばらしい。

※キャンパーたちの信仰が強められた(本物になった)。

※親たちとリーダーたちとの信頼関係が強められた。

※自分たちの目標をはるかに超えた主のご計画だった。

私はこのすばらしいキャンプに加えていただき、このすばらしい神の恵みを体験できて、感謝でいっぱいだった。

(これでフレッド田中の証しを終わります。)

日本CEF(日本児童福音伝道協会)

〒311-3434 茨城県小美玉市栗又四ヶ 2421-6

TEL 0299(28)2031 URL: <http://www.cef.or.jp>

献金振替 00160-1-59313

(宗) 日本児童福音伝道協会